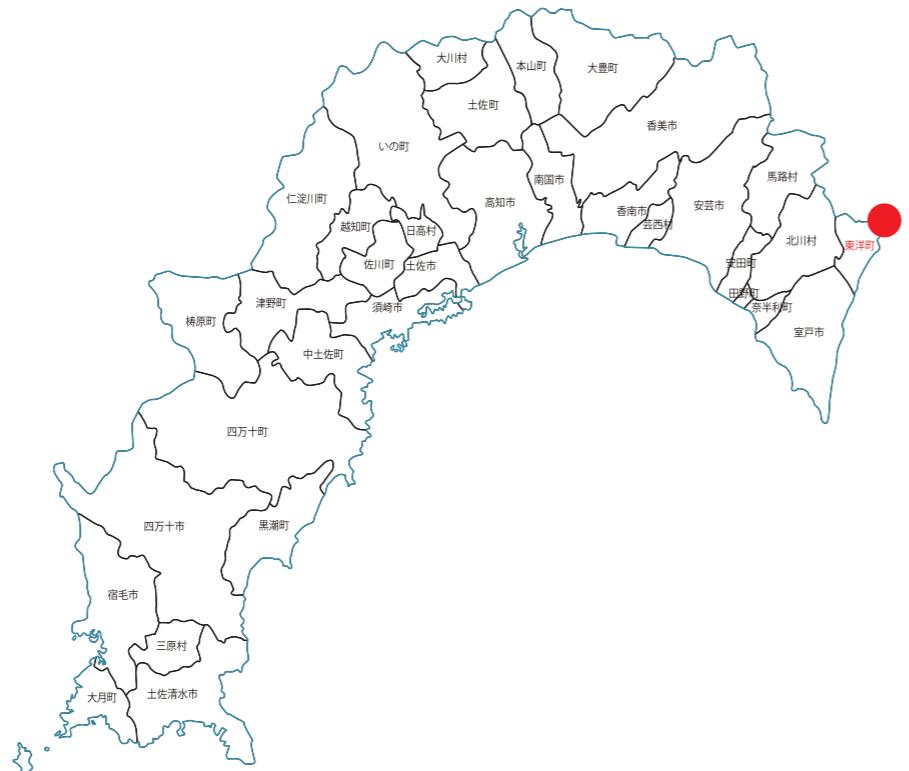


1

# ひよこち踊り (県指定 H1.3.29)



旧暦8月14日、甲浦八幡宮宵祭りに境内で奉納される。ただし、小池・河内地区が祭り当番となった年に限られるので、3年目ごとの奉納。県東部や隣接する徳島県側の太刀踊りの系譜であるが、踊り歌のひとつに”ひよこち”と題したものがあり、これがこの太刀踊りの総称ともなっている。踊り子の人数は不特定。幼少年の小太刀、少青年の大太刀2組が相対して踊る。飛白の着流しの服装であったが、昭和43年から袴着姿となり、花取り、扇踊り、ひいけひいけ、抜きかきつ、ころんべえ、の5通り。花取りでは大太刀はヨリボーと称する竹棒、小太刀は太刀を手にし、扇踊りでは大太刀、小太刀とともに扇と太刀を手にするなど演目によって手にするものが異なる。

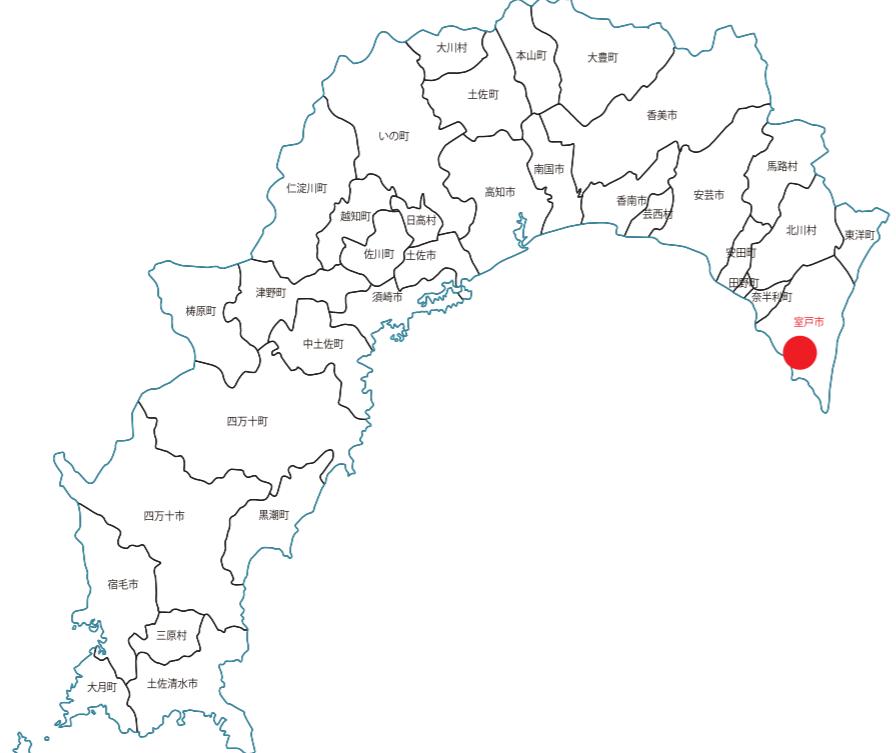


2

# 吉良川の御田祭 (国指定 S52.5.17)



西暦奇数年5月3日、吉良川町御田八幡宮<sup>おんだはちまんぐう</sup>で奉納される。早朝から昼ごろにかけて、ヨッピンピーロと囁<sup>はや</sup>しながら、主な神社を巡り踊る”練り”でのビンササラという楽器は本県唯一のもの。昼ごろから拝殿を舞台として田打ちから収穫までの田楽能が演じられる。女猿楽、三番神、翁、牛、田打ち、えぶり指<sup>さし</sup>、田植、酒しほり、田刈、小林、魚釣り、地堅めの演目がある。各演目の合間ごとに殿と冠者とが登場し、面白おかしく次の演目名を触れていく演出には、古い狂言の要素がある。酒しほりでは杜氏婆の産んだ神の子の木偶を、子宝に恵まれない女性たちが奪いあうことから、子授け信仰としても知られている。由来伝承は不詳であるが、芸能、地謡、服装、仮面、いずれの点から見ても古いものである。

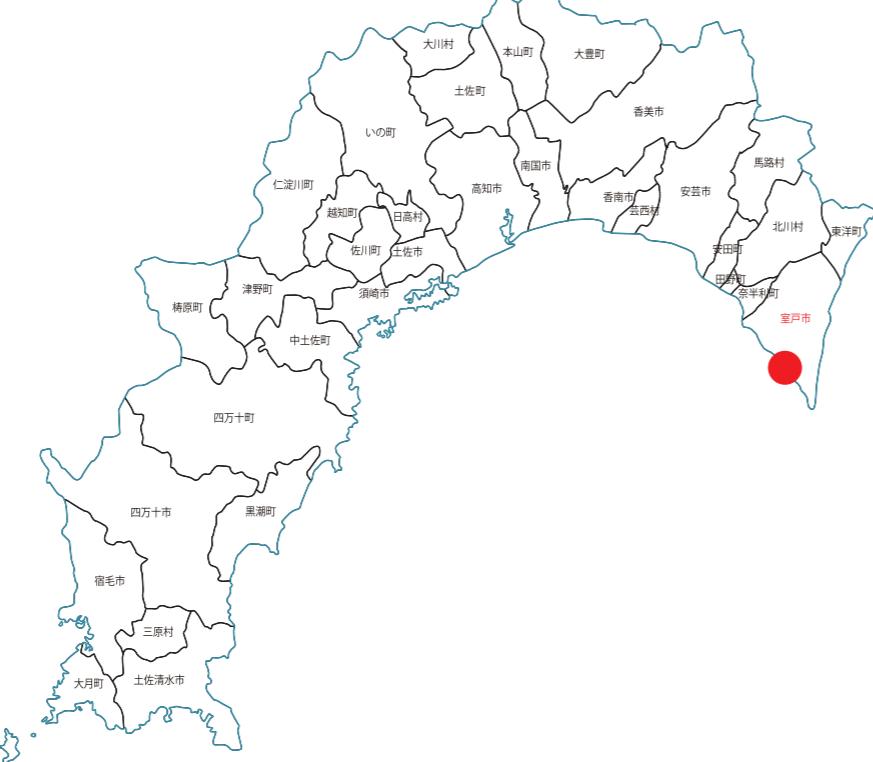


3



# おど シットロト踊り (県指定 S38.3.29)

旧暦6月10日の早朝から室戸市元の恵比須神社を踊り始めとし、市内の神社や仏閣などおよそ30箇所を踊り巡り、踊り納めは夕刻になる。その歌詞に「シットロに合わしてふうふう回る」とあるシットロがこの踊りの名称となっている。演目は、まづ急げ、川なれなど14通りで、浴衣姿、足袋、草鞋ばき、縁に5色の紙四手を飾りつけた笠をかぶる。笠の頂点には、マスト状の柱を立て、災厄を去るの猿の縫いぐるみを吊り下げる。この笠をかぶらせてもらうと御利益がある。踊り子は漁業従事者で、豊漁祈願の踊りとされて、人魚伝説もあるが、奈良師地蔵堂の“三藏”なる人物も由来伝承のひとつ。歌、鉦、動作からみて念佛踊り系のもので、大正初年ごろから漁祈願の踊りとして復活し、今日に至る。

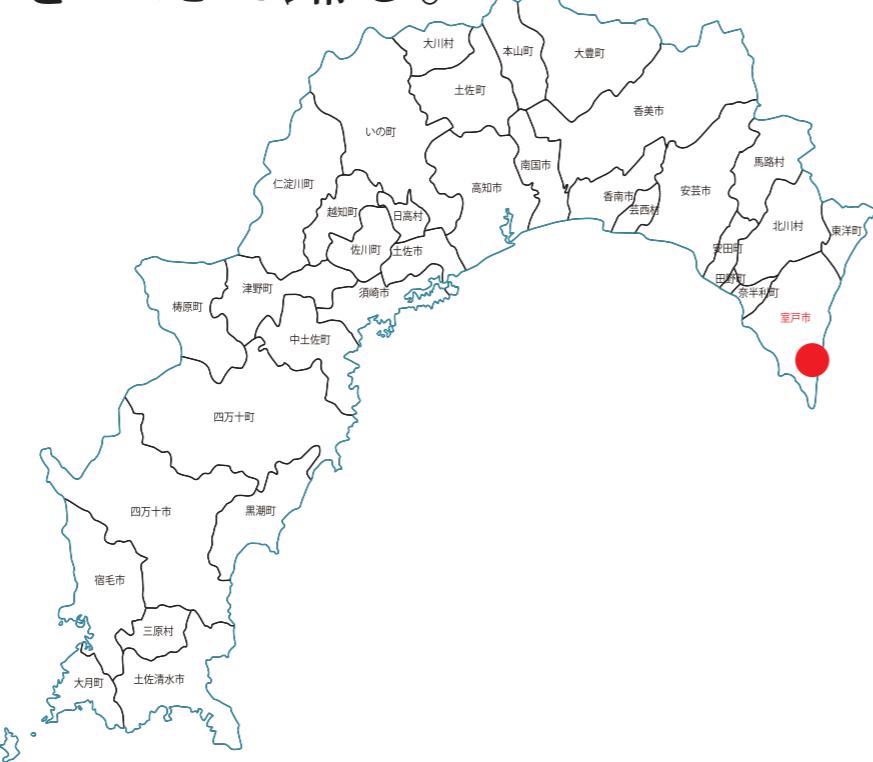


4



# しい な た ち おど 椎名太刀踊り (県指定 S40.6.18)

10月15日、椎名八王子宮秋祭りの神幸が終わったあと、拝殿を舞台として奉納される。引幕もあり、かつての地芝居の名残りをとどめる拝殿で行われる太刀踊りは、県指定の中では唯一のもの。また、楽器に鉦・太鼓を用いず、拍子木で床をたたいてリズムをとり、歌舞伎の見得と似た所作を見せるなどを大きな特色とする。翌16日も荒神様、巖島神社、夕刻には八王子宮拝殿で演じられる。椎名太刀踊りには、椎名上組、椎名下組の2つの踊りの組があり、歌詞、所作が各々異なる。上組は、あれみよ、まいろ、ぜんざさんなど7通り、下組は、阿波のくろつち、ようはんなど7通りで、大太刀、小太刀に分かれて、6尺棒、扇、太刀、色紙総飾りのある棒などに持ちものをかえて踊る。

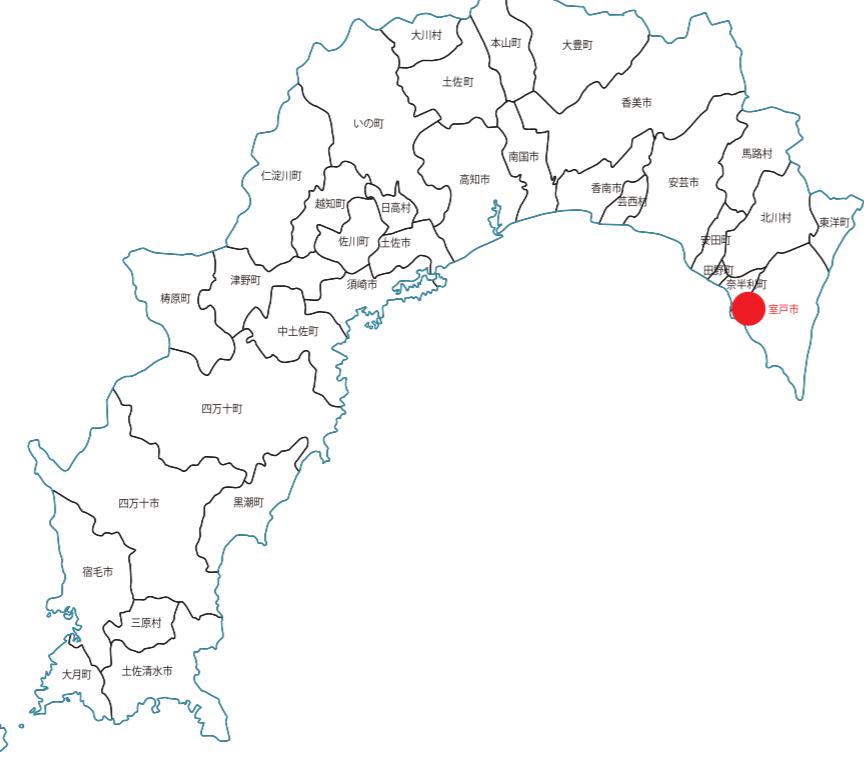


5



# なか がわ うち し しまい 中川内獅子舞 (県指定 S44.8.8)

10月15日、羽根八幡宮秋祭りで隔年に奉納される。ただし、近年奉納されない年もある。由来伝承は未詳。神幸に先立って境内で一度、旅所で一度奉納される。踊り場は塩祓<sup>はら</sup>いで清められると、獅子や踊り子以外は入ることができない。四隅は鼻高面がササラと称する竹輪を持って警護する。テガイ獅子の類に属し、テガイ子は赤花柄の着物、赤襷<sup>あかだすき</sup>に手甲といつた女装で、ウヅラと称する棕櫚<sup>しゅろ</sup>で作った冠り物をし、ザイと称する紙総飾りの棒を持つ。このテガイ子が青年であるので、獅子と連繋する動きが敏活で、引き締まっており、かつ内容的にも曲芸的要素を濃くしており、県下の獅子舞ではよく洗練されたもののひとつである。終末部で傘を喰わえて狂うさまは圧巻である。

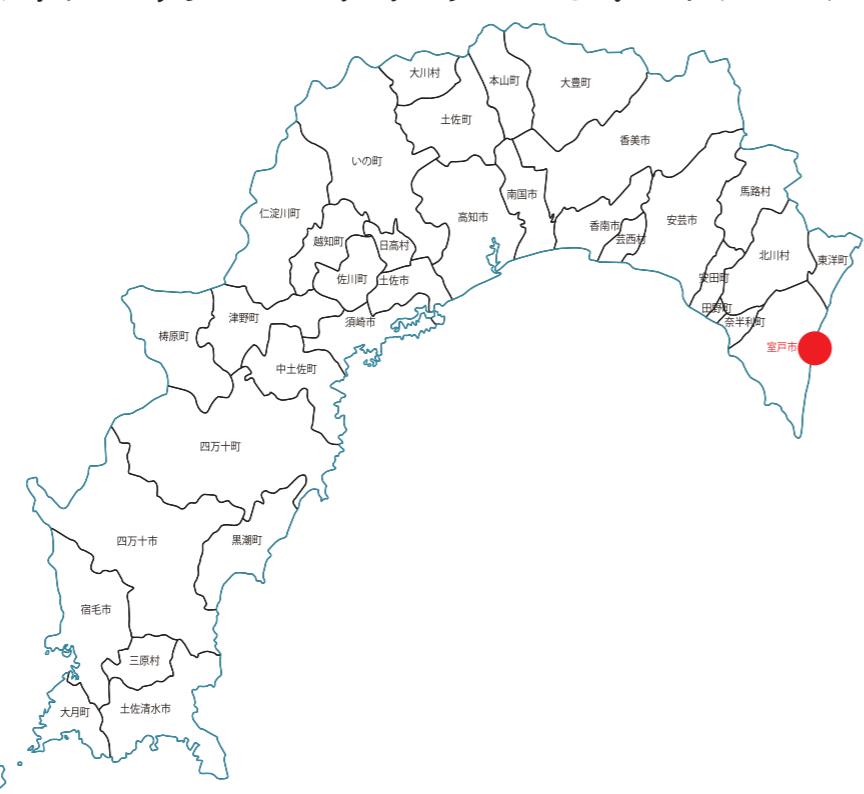


# むろ と し さ き はま はち まん ぐう こ し き ぎ ょう じ 室戸市佐喜浜八幡宮古式行事 (県指定 S59.3.16)

6



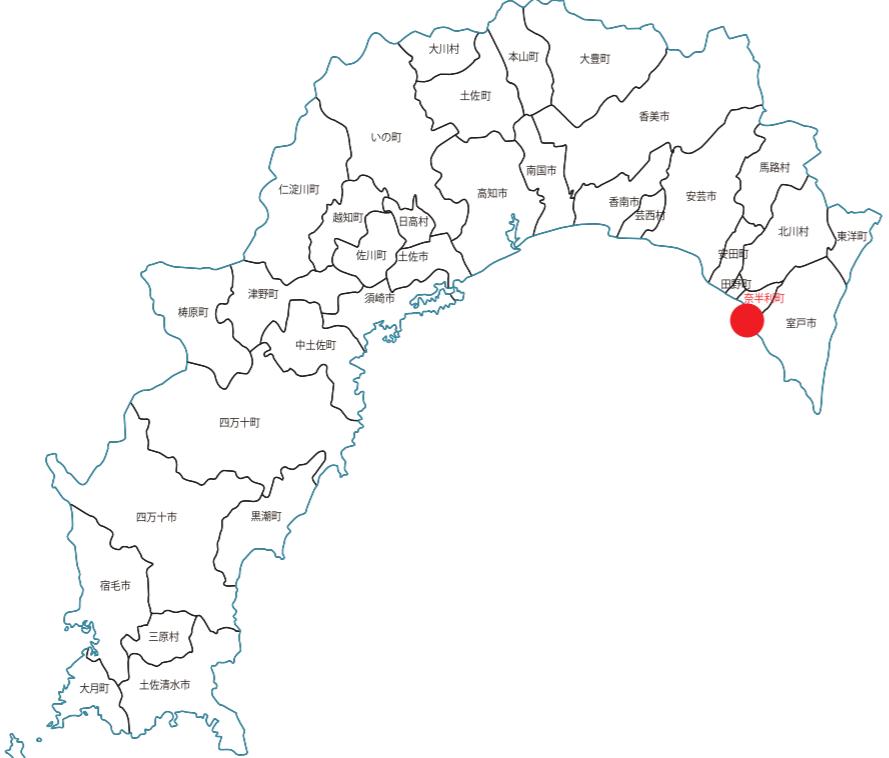
毎年10月、体育の日の前日の日曜日に催される佐喜浜八幡宮秋祭りを総じて、佐喜浜八幡宮古式行事と称する。宵宮、神幸、獅子舞、俄芝居を骨格とする。祭り前夜の宵宮では、お舟と称する台車が船唄に引かれて町中から神社へと向かう。祭り当日の神幸では、袴姿、白張姿の供人が熊毛、鳥毛、立傘、天狗面、神饌などの順で列をなす。世襲制の社人のほかに助一御前、小神子という役がある。獅子舞は、神幸出立に先立つて団平という唄を歌ったあと、社殿前、参道、旅所などで演じられる。テガイ子はなく、2人立ちの獅子が見事な姿態を演じる。俄芝居は、脚本、役者、衣装も一夜のうちに決めてしまうもので社会風刺を織り込んだ即興劇は全国的にも注目される。



7

# か りょう ごう し し まい 加領郷獅子舞 (県指定 S44.8.8)

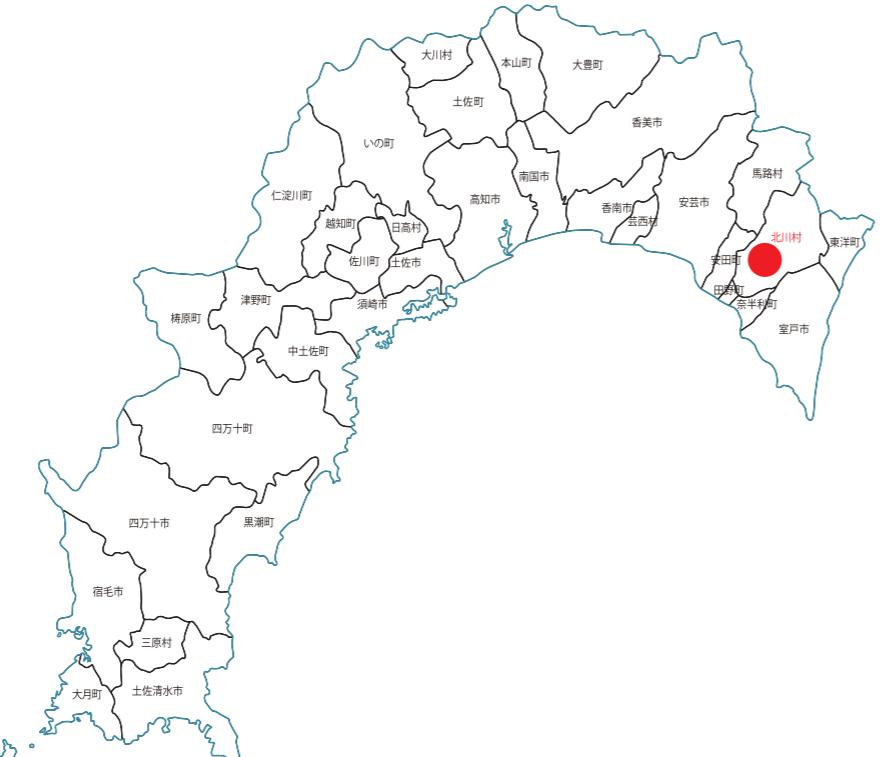
のぶもり  
加領郷信守神社秋祭りに奉納される。祭日は旧暦9月25日であるが、氏子たちの生業の都合で、この日に近い土・日曜日と一定していない。室戸市中川内獅子舞を伝授されたものと伝えているが、室戸市羽根町とは相接しており、獅子舞の曲芸的演技を見せる点などよく似ており、その伝承は十分に考えられよう。テガイ子は少年で襷がけの花柄の短い着物に黒脚絆、白足袋に草鞋、黒手甲に頭に棕櫚の冠り物である。長さ数十cmの棒の両端に紙総飾りをしたザイと称するものを持ち、足の動きはゆっくりとして大きく、次第に近づいて獅子を起こす。やがて馬乗りになったり、傘で獅子を操ったりする。浜辺の旅所で行われる獅子舞に続いて、ハッピ姿の棒打ちが行われる。



8

# ほし じん じゃ ゆみ まつ 星神社のお弓祭り (県指定 S39.6.12)

さいれいぎょうじ  
祭礼行事  
西暦奇数年の1月8日早朝から、星神社境内で夕暮れにかけて行われ、境内に接して金法寺があるところから、”金法寺の弓祭り”とも称する。射手12人は、薬師如来十二神将によるもので、悪魔退治の修法と伝えている。12人はオモ、タニの2組に分かれ、三度弓、神頭・雁股の矢、初的の儀礼弓に続き1008筋の矢を放つと、ナマヤ、割り膝、投げし、毘沙門の的の儀礼弓をもって終わる。1008筋では、村人たちが懸賞をかけて大いに賑わう。射手は、この日のために元日から川水で身を清め、袴を着する時にも呪文を唱えるなど古式を保っているが、弓に神仏を宿らせる弦掛けの儀では神職と僧侶がこれを行い、毘沙門の的では僧侶が祈念するなど神仏習合時代の面影を今に伝えている。

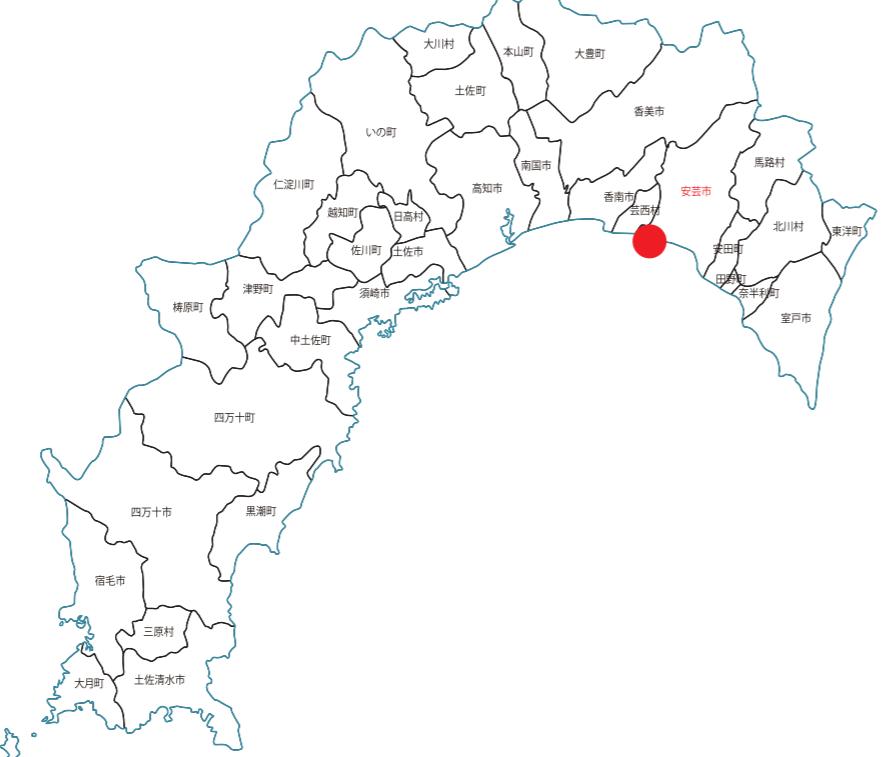


9



# 赤野獅子舞 (県指定 S44.8.8)

10月19日、赤野大元神社秋祭りの神幸が、旅所である住吉神社に着くと、近くの浜辺で奉納される。テガイ獅子であるが、その演出が素朴でユーモラスな点に特色があり、県下の獅子舞のなかでもっとも土俗的である。大元神社祭祀は氏子圏が8組に分かれたり、各組が順番に神輿<sup>みこし</sup>担ぎと獅子舞を出すことになっている。従って各組の青年たちがさまざまな工夫を凝らしてその技を競うことになる。その面白さは獅子を起こすテガイ子の扮装にあり、それが飛脚であったり、野良着姿の農民夫婦であったり、その数も1人であったり、3人であったりする。その扮装に応じた仕草を面白おかしく演じながら、伏している獅子を起こし、荒れる獅子を制するように舞い終わる。7月22日、23日の夏祭りにも行われる。



# 10

# はつ おどり 棒踊 (県指定 S38.7.5)

11月18日、浅上王子宮秋祭りの神幸が旅所から帰ると、その境内で奉納される。5代藩主豊房家老山内規重が、山北に蟻居を命じられた時、家臣刈谷又右衛門が村の若者を集めて小栗正流棒術を教えて御覽に供したことに始まるといい、規重の子豊敷が8代藩主となるに及んで、祭礼に山内家三ツ柏紋を許されるほどになる。棒踊りは、棒術と称した方がふさわしく、本棒と小棒（個棒・子棒）とからなる。本棒は、20人の集団演技で、10人ずつ左右に分かれ対峙し交戦し、その棒の織りなす構図が見事である。小棒は、2人1組で演じられるもので、カワキリ、ヒシ、ツキ、ハナ、トビの5通りの技がある。余興として、軽業芸の車返し、酒漢のさまを演じるヨーダンボーは、ユーモラスなものである。

